

7/22 旗

# 女学生特攻機部品作り

終戦が自由開く

第5部

## 第2次世界大戦 終結70年

### 庶民にとっての戦争

-3-

「君たちは、今日から三井玉野造船へ学徒動員で行くことになった。1944年夏のある朝、岡山県玉野市の玉野高等女学校（現玉野高校）の校長が朝礼で梶尾玲子さん（当時14）に命を命じました。「女学生も戦地の兵隊さんに負けないよう頑張ること」

それまでも、登校しても授業はほとんどありません。近隣農場の田植えや草取り、軍服のボタンつけ、砲弾の材料をつくるため、金属を精錬所へ運搬することが日課でした。

「男だったら、特攻隊に



梶尾玲子さん



勤労動員されていたころの梶尾さん（中央）岡山県玉野市

学生8人が従事。直径1センチの筒を作り、まともな物は1人1本ほどしかできません。何に使うのかと指導員に聞くと、「特攻機の部品だ」といいます。

#### 兵士思い痛む心

「こんな粗悪な製品を使って敵艦に体当たりし、若い命を散らす特攻隊員のことを思うと、すごく悲しくなりました」と梶尾さん。旋盤の仕事で困ったのは、胸から膝まで油まみれがほしかった」

になることです。着替えもなければ、タオルもせつけない。夕暮れになると、汗が乾かずに、工場の出入り口に、のこぎりくずを入れた大きな箱が置いてあり、そのなかで手をもんで油を吸わせる毎日でした。

「これが全然落ちません。真っ黒の手と顔で帰るの汽車に乗り、随分恥ずかしい思いをしました。当時は、ほしがりません勝つまでは」と戦意高揚標語の生活でしたが、せめて着替えがほしかった」

「これが全然落ちません。真っ黒の手と顔で帰るの汽車に乗り、随分恥ずかしい思いをしました。当時は、ほしがりません勝つまでは」と戦意高揚標語の生活でしたが、せめて着替えがほしかった」

学徒勤労動員 アジア太平洋戦争末期、労働力不足を補うために、中学校以上の生徒や学生が軍需工場や食料生産に動員されました。東条英機内閣が1943年6月、「学徒戦時動員体制確立要綱」を閣議決定。学徒動員による死者は1万966人、傷病者は9万789人にのぼりました。（文部科学省『学制百年史』）

終戦の翌8月16日、造船所内の竹垣をめぐるした宿舍の扉が大きく開かれ、働かされていた朝鮮の人たちが大声で叫びながら出てきました。玉野には1500人の朝鮮人がいた（『玉野市史』）との記録があります。

戦争に協力してきたとして、校長と教頭が追放されました。40過ぎて召集された国語教師が学校に戻ってきました。戦時中、一言も口にできなかった英語教師がすらすらと英語をしゃべりだしました。

勤労動員からようやく解放された現在の85歳の梶尾さん。いま大好きな帽子をかぶり、語ります。

「女学生本来の勉強ができず、アジアの人々と私たち国民を苦しめた侵略戦争を『正しい戦争』だと、軍国主義に染めていった教育の恐ろしさを悔しくかみめています」（名越正治）

（つづく）